

ありふれた話

千歳緑

【天邪鬼ふたり】

「あなたが死ぬ夢を見ました」

とどこどころが錆びた緑のフェンスに背を預け、静かにそう告げる後輩の声は実に平坦なもので。

その言葉で一体俺に何を伝えたいのか、真意が分からなかった。

それで？ と、続きを促せば、彼はまたその声のまま答える。

「率直に言えば、俺はあなたが嫌いなので」
特に何を感じることもありませんでした。

彼の黒い瞳を見れば、なるほどそれは嘘ではないのだろうと分かる。それはそうか。『嫌い』だと、臆せず俺に言う彼女のだから。

しかし何も感じなかったなら、それで話は終わりだろうか？

それを何故俺に言う必要があったのか、と問う。当然の疑問だ。

「だから、何も感じなかったんです」

「嬉しくなかったんです。全く」

「俺はあなたが嫌いだけど、死んでほしいんじゃないよ。嫌いなだけで」

「だから死なないでください」

「現実のあなたは」

ぼつりぼつりと、淡々と、重ねられる言葉に思わず笑ってしまった。俺のその反応がお気に召さなかったようで、彼は少しむっとしたように目つきを鋭くした。

「何がおかしいんですか」

子供のように口をとがらせる彼は、何も気づいていないらしい。この彼は純粹なのか、それとも。

「さん？」

ほら、お前はまたそうやって俺の名前を呼ぶ。

どうせその夢でも、お前は死に向かう俺を呼び止めたんだらう？

嫌いな奴の背をいつまでも追い続ける馬鹿なお前は。

さて。

生きてください、とは決して言わないこいつになんと言
そうか。

【純白】

お菓子の箱の中に作られた、ティッシュペーパーとハン
カチのベッド。それは、右側の羽のない赤とんぼのために、
彼女が作った病室だった。

「だめ、だめ、しないです」

弱弱しく羽を震わせる患者に、彼女は泣きながらそう言
った。

「だめだよ、しんじやだめ」

ああ、綺麗だ。この七歳の女神様の涙は、それはもう透
明で綺麗だ。

患者にその意味が理解できるかは分からないけれど。
「しないです」

もう何度目かのその言葉を口にした頃、とんぼは動かな
くなった。

彼女はそのままそこに座り込んでしまう。そうしてまた、
ぼろぼろと涙をこぼして泣く。

そろそろ俺の出番だろうか。

「美沙紀」

後ろから彼女の名前を呼べば、その大きな目に涙を浮か
べたまま、こちらを振り返った。

「お兄ちゃん、とんぼ、しんじやった」

「ああ、そうだな」

「助けてあげられなかった」

「仕方ない。美沙紀は頑張ったよ。こいつも、ありがとう
って思ってるさ」

できるだけ優しい声でそう言って、抱き寄せる。

我ながら嘘が上手くなったものだ。まあ仕方ないことだ
ろう。俺はこの小さな子供より十年も先にこの世に生まれ
たのだから。

「泣いていないで、とんぼを埋めてあげよう？」
「……うん」

「よし」

涙をハンカチでぬぐってやって、二人で木の下に墓を作った。

手を合わせてやるといいよ、と言えば、美沙紀は素直に従って、目をつむって小さな両手を合わせる。

本当に、この子供は真っ白だ。

遊び半分でとんぼの羽を抜くような、残酷なこともできるのが子供なのだけれど。彼女はそれを助けようとする側なのだから。

たとえ、放っておいたほうがすぐに死ねて楽だったとしても。

たとえ、生きながらえさせたことが苦しみでしかなかったとしても。

そして、たとえあの患者に恨まれていたとしても。

彼女は助けるのだ。

それを綺麗なことだと知っているから。

「……帰ろう。もう風が冷たくなってきた」

手を差し出せば、彼女は小さく頷いて、それをきゅっと掴んだ。

きつと明日も彼女は手を合わせにここへやって来る。

その純白の心を持っている限り、ずっと。

それでもこの世界では、綺麗なものは多分罪でしかないのだろう。

【心拍数】

ふと目が合えば、なんだよ、と彼は眉間に皺を寄せる。

「別になにも」

視線をそらして適当に返す。だって本当に意味なんて無いし。

「はあ？ なんもないのに見るなっつての」

ほんの一秒目が合っただけでうるさい奴だな、と思う。

誰が好き好んであんたなんか見るか。

いつもいつもそうだ。そんなに話したこともないのに、

ちよつと視線がぶつかれば突っかかって来る。

いつもならそこで会話は終了なのだが、今日はそうしな

かった。

「どうしていつも声かけてくるの」

同じ教室にいれば、目が合うことくらいあるでしょ？

毎回毎回あんな反応をされれば、少しくらいの腹は立つものだ。こちらとしては、好きでも嫌いでもないただのクラスメートだったのに。

そんなに私が気に食わないのか、という直接的な言葉は言えなかった。彼と口論なんて気まずいことはしたくない。

なんと返してくるかど内心かなり緊張していた。

しかし、そんなのはすぐに綺麗にふっ飛んでしまった。

「……お前、に……見られると気になんだよ！」

顔を背けて、早口でそう言う彼の姿を見てしまったから。逃げるようにして教室を出ていく彼の背を見送る。もうすぐ昼休み終わるよ、なんて声をかけることもできなかつた。

彼の耳が若干赤かったのは私の見間違いか、それだけ彼を怒らせてしまったということか、それとも別の理由か。

そんなことを考えてしまう自分が嫌になって、頭の中を無理やり次の授業の内容に切り替えた。

明日になっても。

きつと、会話も触れ合いも気持ちも増えたりはしない。増えるのはこの、うるさい心拍数だけだ。

【有償無償】

「これあげる」

「は？ 有償だろどうせ」

「いや、無償で」

「……そんなの信じられない」

「まあ別にそれでもいいけど？」

愛情は大体これくらいのもの。

【鍵のない鳥籠】

昔から、人に飼われた鳥を見るのがあまり好きではなかった。

小さい鳥籠の中で、綺麗な色の羽を大きく広げることもなく、自由に飛ぶこともない。そのまま彼らは籠に囲われた小さな世界で死んでいくのだ。

幼い頃の僕はそれをただ可哀想だと思っていて、それは高校生になった今でも変わらない。鳥を飼っている人を否定するわけではないが、やはり僕自身はどうしてもそれを見たくはないのだ。

なんの気なしにそう話したら、隣に座る彼女が笑った。

「なんだか可愛いですね」

「我ながら子供じみてるとは思うよ」

男としては可愛い褒め言葉にはならない。つい拗ねたような言い方になってしまふ。

「悪い意味じゃないですよ。考え方は人それぞれじゃないですか」

「なるほどね。じゃあ君はどう思う？」

「ペットなら構わないと思うかい？」

「そう問いかけてみたものの、別に自分と同じ答えは求め

ていない。ただ何となく、彼女ならどう考えるのかと純粋に興味をわいた。

「私ですか？　そうですね……」

口元に手をやって、眉間にちよつと皺を寄せて。僕が何か聞きたびに、こつやつていつも彼女は考えてくれるのだ。そんなに難しく考えなくていいよ、と言ってみたことがあった。それでも彼女は、適当な答えはしたくないんです、と笑った。

しばらくして、彼女の口から出てきた言葉は意外なものだった。

「私は、そのどちらでもないですね」

「……どちらでも？」

「はい。ペットなら全て閉じ込めていいとは思ってませんが、それが可哀想とも思いません」

と、言うよりも。

「私は、それを望む鳥もいると思うんですよ」

窓の外を飛ぶ鳥を見ながら、彼女は軽い口調でそう言った。

「それ、っていうのは……籠の中を望むってこと？」

「はい」

「どうして？」

「……先輩は、鳥が自由を奪われていると思いますか」

「ああ、そうだね」

「だってそうだろう。飛べる羽を奪っているようなものじゃないか。」

「質問の意図がよく分からないままにそう返した。」

「でも、外にはたくさん危険なことがあるじゃないですか。籠の中にいれば安全なのに。……傷つきたくない、温かい場所にとずっといたい、愛されていたい。そう思う鳥がいてもおかしくないでしょう？　そういう鳥はきっと、鳥籠の中を選ぶと思うんです」

「その言葉にはっとした。」

「彼女は返事を待たずに僕の手をとって、続ける。」

「捕らわれていたいと思う鳥もいるかもしれない。……私のように」

「……ああ、そうか。」

「君は自由を望まないのか」

「先輩が相手なら」

「僕は捕らえておこうなんて思わないよ」

「だから、鳥籠に鍵はかけないでおくさ。」

「笑ってそう言えば、彼女もまた悪戯っぽく笑う。」

「それでもきくと、私は出ていこうとは思いません」

「自由を望まない鳥がいるのなら。」

「鳥籠を眺めるのも、案外悪くはないかもしれないな。」

【足りない】

「二か所もミスがある。細かいミスも積もれば後で面倒事になると、いつも言ってるだろうが」

「学習しろ、と舌打ちする目の前のこの上司とは、気づけばもう随分と長い付き合いになる。」

「すみませんでした。以後気を付けます」

「その台詞は聞き飽きた」

「……申し訳ありません」

「もういい」

短くそう言って、彼は私に背を向けて自分のデスクに腰掛けた。私も書類のミスを直しにデスクトップに向かい合う。室内はほんの数十分前とまるで変わらない光景に戻った。

かたかたと、キーボードを叩く音だけが響く。皆が外に出ていく昼時のこの部屋には、仏頂面の上司と私だけ。会話はほとんど無い。いつものことだ。

ただ、たまにそうじゃないときがある。今日はその珍しい日に当たったようで。

「昼休憩まで仕事とは、お前も奇特な奴だな」

彼が不意に口を開いた。

そう言う自分も仕事してるじゃないですか、という言葉は飲み込んだ。これ以上機嫌を悪くしてほしくはない。

「自分の責任ですから。それに、要領もいまいほうじゃないですし」

液晶から目は離さないまま、答える。

「そんなこと知ってる」

即座に返って来た言葉に苦笑する。それは学生時代から変わらない、という意味だろうか。

「それでも努力だけはするんだから、俺には全く理解できないな」

「だってそうするべきじゃないですか」

「ああ、多分それで正解だ」

予期せぬ曖昧な肯定に、思わず頭を上げて上司のほうを見た。

「お前は頭が足りないわけではないだろ。だからそれでいい。それくらいさっさと終わらせろ」

定時で上がれたら、久しぶりに飲みに連れてってやる。

あくまでも書類に目を通しながら付け足された一言。それが自分に向けられた言葉だと認識できたのは、部屋に誰もいないことを確認した後だった。

「……頑張ります」

「当たり前だ」

そうしてまた、部屋には無機質な音だけが満ちるのだ。

私と違って、足りないものの無さそうなあなた。

そんなあなたに足りないのは、優しさなんかではなく。

(その口から零れる言葉)

【唯一で絶対の理解者】

死んでくれ、と言えば死にたくないと言っただろうけど、残念ながら殺すのはいつでも容易く出来てしまう。

この世でもしかしたら一番嫌いかもしれないし、その逆かもしれない。

強いて言うならそんな存在かな、と思う。

けど、俺を一番「分かってる」のはそれなわけで。

だから結局は手放せないまま十年以上の付き合いになっているのだから、これはもう笑うしかない。

「面倒だなあほんと」

自分自身って。

【溜息のように嘘を吐く】

大切な友達だと、彼女にそう言われたのは記憶に新しい。そしてその言葉に、私は何も返さなかったことも。

女というのは、いくつになっても「親友」という言葉が大好きなんだと思う。子供の頃もそうだったが、大学生になった今でも変わらない。

メールで、SNSで、直接相手の前で。いつだって女は口にしたがるのだ。あなたは一番私を分かってくれる親友だ、と。

頭の中で、甘ったるい女の声でその台詞が再生される。

こんなの自分の想像にすぎないというのに、吐き気がした。気持ちが悪い。

もう何人にも使い回したその言葉を、まるで綺麗なもののように平然と口にするその行為が。そこに本心など一つもないくせに、よく言う。

とはいっても、私もまた心の中で嘲笑してきた彼女たちと同じ、女だ。どんなにそれが汚く目に映って、不快で仕方なかったとしても。結局は女であることは変えられない。

社会で生きていくことを諦めない限り、私は女として、女に紛れているしかないのだ。適度に人間関係を作って、

笑って、腹の内を探り合って。

はあ。

一つ、意識とは関係なく溜息がこぼれた。

「またため息ついてるー。だいじょうぶ？」

隣に座る彼女が私に話しかけてきた。どこぞの先輩がかつこいいとか、そういう話はもう終わったのだろうか。

自分の話しかしていないことが原因だとは思わないらしい。まあ一応相槌は打っていたし、気づくはずもないか。

ああ、うん、大丈夫。笑顔を作ってそう言うのにも慣れたものだ。

「そう？　じゃあさっきの続きなんだけど……」

彼女はそう言って、また楽しそうに話を続けるのだ。

『ため息つくの、癖なの？』

少し前に、彼女にそう聞かれたことがあった。

…ああ、そうだね。よく溜息を吐くのは私の癖だよ。

あなたが、女が、嘘を吐くのと同じ。ただの癖。

こんな考えしかできない自分の性格の悪さなんて、とうに自覚済みだ。でも、こうでもしなきゃ女は人間でいられ

ない。世の中の男性は覚えておくといい。

しかしまあ、私が彼女にそんな話をすることは一生無いだろう。

だって、女は内面に隠したものを知られたらもう生きられないのだし。

そして何より。

私は彼女の「親友」らしいので。

【閉じた世界で君を呼ぶ】

恋というのは落ちたら負けらしい。

確かにそうかもしれないと思う。恋は本当に人を盲目にしてしまうから。

それと、恋というのは次第に熱を失っていくものらしい。

これは間違っていると思う。まあ、結構な数のカップルや夫婦は歳を重ねるごとに上手いかなくなっていく、というのによく見聞きするけれど。

それでも、俺はやっぱり間違っていると思う。

だって、俺は彼女無しでは生きていけないと思うから。

あるとき彼女がテレビを見ながら言った。

「キミってよく分からない」

あまりに平坦な声だったから、それがテレビの内容にではなく、俺に向けられた言葉だということは五秒後にやっと分かった。

「どういうこと？」

こちらを見ようとはしない彼女の横顔に問いかける。しかし彼女は俺を見返さない。

「だって、テレビ見ないで私のことばかり見てるから」

「気付いてた？」

「あれだけ見られてれば気づくよ」

テレビ見てる人間の顔なんて見てて楽しい？

彼女はここでやっと、体ごと顔をこちらに向けてくれた。

二人掛けのソファアが小さく沈む。

「そりゃあ、見るたびにあなたに惚れてるから」

にやける顔を隠そうともせず、笑顔でそう言ったら、頬を軽くつねられた。痛くは無いけどびっくりする。さらに

そのまま頬に両手を添えられたから、もっと驚いた。

「付き合って七年経っても？」

「うん、七年経っても変わらない」

この先も。

その一言は呆れられそうだから言わないでおこうかと思っただけれど、気づいたらもう口にしていた。案の定、彼女は軽く溜息をついた。不意に両頬の手が離れて、少し寂しく感じる。

「キミはもっと私以外を必要としたほうがいい」

宥めるようなその言い方にちよっとむっとした。だから

俺はわざと軽い口調で返す。

「それって、浮気してもいいってこと？」

「それは許さない」

力強い即答だった。いつもは猫みたいにつれないけれど、でもこういうときには、ああ俺って結構愛されてるんだな、なんて思う。こうして時々、一方通行じゃないのが分かる。そんな関係でいられるのがどうしようもなく幸せだ。

そんな気持ちは顔に出ていたようで、今度は頬をぺちんと叩かれた。やっぱり痛くはないけれど、彼女のやけに真

剣な目がまっすぐこちらに向けられていて、なんだか少し緊張した。

「私が死んだらどうするの」

「そしたら俺も死ぬ」

「そんなの私は望んでない」

まるで子供のケンカみたいだな、と他人事のように思った。でも、こっちだって譲る気はない。

「あなたが望んでなくても、俺はそうしたい」

だって生きていけるわけがないんだ。

あなたがいないと楽しくない。嬉しくない。幸せじゃない。あなたが消えて、他の誰の世界が変わらなくても、俺の世界はそれで終わりなんだよ。

「だから、あなた以外はいらなんだってば」

駄々をこねるみたいな言葉を告げた。

そうしたら、あなたは困ったように、けれど幸せそうに笑った。

【あなたがいるから】

本来透明なはずの息が白く色づいた。

ああ、今日は寒い。どんなに完全防備を心がけても、顔面だけはこの冷たすぎる外気から守れない。それでもせめてもの抵抗に、千円ぼつきりで購入した薄いマフラーに鼻先を埋めた。

日が沈んでからほんの数分で、辺りは随分と暗くなっていた。人通りも車通りも無い自宅への帰路には、まるでこの世界に俺しかいないような錯覚を覚える。

毎日毎日、こんな同じ道を通っている。家と会社の往復なんてそんなものだ。別に何も特別なことはありはしない。けれど今日は、寂しい、と思う。

この空の暗さのせいなのか、寒さのせいなのか、それとも何か別の理由のせいなのかは分からない。ただ、ときどきそう思うことがある。本当に、ほんの少しだけ。悲しく、寂しくなる。

たった数年前、まだ大学生だったときにも同じようなことを感じた。一人暮らしのあの小さな部屋に帰るときに。あのときはこの言いようのない寂しさをどのように処理し

ていただろう。ふとそんなことを考えたが、思い出せなかった。

外套の少ない道を歩き続けて、やっと白塗りのアパートが見えてきた。自宅のカーテンから漏れる明かりを見ると、思わず笑みがこぼれる。つい急ぎ足になるのが自分でも分かった。

ああ、もういいんだ。この気持ちへの対処法なんて、もう思い出せなくていい。

ポケットから鍵を取り出して、ノブを回す。

ドアを開ければ、ふわりと美味しそうな匂いが鼻をくすぐった。

「おかえり」

彼女が笑う。

「ただいま」

俺も笑顔で返す。

たったこれだけで、さっきまでの気持ちは綺麗に消えて無くなってしまふ。不思議だなあと思うけれど、それで当たり前な気もした。

きつと夕方夜も、案外温かいものなのだ。

だって俺が帰る家には、あなたがいるから。

月刊缶じうす学祭号 通巻192号

2013年 10月22日発行

編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成

印刷所 広島大学分団BOX